

学校便り

第379号
平成30年1月9日練馬区立光が丘第八小学校
校長 鈴木 隆志

あの日から2500日

校長 鈴木 隆志

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、健やかに初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年の干支（えと）は「戊戌（つちのえ・いぬ）」です。「戊」の字は「茂」に通じ、植物の生長が絶頂にあるという意味があり、「戌」の字は「滅」に通じ、全てのものが土の中に還っていく状態を表します。「戊戌」の今年は、良いこと悪いことがはっきりと分かれるため、草木が再生するために土に還るように、不要なものを切り捨てることで新たなチャンスを得ていくという年になるのでしょうか。何を残し何を捨てるかを明確に判断していくことが大事だと考えます。

昨年11月末に、宮城県女川町の『いのちの石碑』を巡る旅をしました。平成23年3月11日の東日本大震災では、女川町も甚大な被害を被りました。人口10014人の内、死者・行方不明者は827人、住家の被害は約9割に達します。最大遡上高34.7mという大津波によって、町全体が一瞬にして流されてしまったのです。当時小学校6年生だった子供たちは、自分たちにできることは何かを考え、「絆を深める」「高台への避難ルート」「記録に残す」という三つのテーマをもとにして『いのちの石碑プロジェクト』を立ち上げました。それは、町内にある21の浜の津波が襲ってきた高さの地点に石碑を建てるというプランです。千年後の命を守るための礎にしようというものです。

計画を練り、1口100円の募金で資金（約1000万円）を集め、平成25年11月23日に1基目の石碑を女川中学校に建てました。子供たちは中学3年生になっていました。自分たちが20歳になるまでに21の石碑を建てる計画で、現在は18基の石碑が完成しています。この子供たちが20歳になる平成30年度には残りの3基が建立される予定です。もうすぐ20歳、立派な大人に成長しました。

『いのちの石碑』には、彼らが中学生ときに詠んだ句がそれぞれ一句ずつ刻まれています。

夢だけは 壊せなかった 大震災 （女川中学校）

ただいまと 聞きたい声が 聞こえない （宮ヶ崎）

逢いたくて でも会えなくて 逢いたくて （鷲神浜）

とりもどそう 笑顔あふれる 女川町 （尾浦）

彼らに俳句を指導したのは、当時女川一中の教員だった佐藤敏郎先生です。佐藤先生は、御自身のお子さんを大川小学校で亡くされています。どんな思いを胸に秘めていらっしゃるのでしょうか…。

『いのちの石碑プロジェクト』の活動の様子は、『1000年後のいのちを守るプロジェクト』のFacebookで見ることができます。「世界防災フォーラム」に参加したり、「いのちの教科書」を作成したり、「活動を伝える会」を催したりと、精力的に活動を続けています。21基の石碑完成後も、彼らの活動はずっと続き、後輩たちにも引き継がれていくことでしょう。

石巻線が復旧し、新しい施設ができてきたとはいえ、女川は、未だ復興半ばです。今も仮設住宅に暮らす人もいます。土砂を積んだ大型ダンプが行き交い、造成地があちらこちらで造られています。港や道路の工事もまだまだです。女川だけでなく、全ての被災地の復興を願ってやみません。

今月13日（土）、あの日から2500日を迎えます。あの日を記憶を捨てることはできません。光っ子たちにも伝え続け、命を尊び、自他の命を大切に作る人間に育ってほしいと願っています。

